翻刻『雪梅芳譚犬の草紙』（六）

肥留川　嘉子
大山　和子
隅田　三鈴
高森　松子

本学図書館蔵の合巻『雪梅芳譚犬の草紙』の「三編下」を、図版を掲げつつ翻刻する。「初編上」から「三編上」までの五冊分の翻刻は、本学日本語日本文学会編『光華日本文学』第十二号（平成十六年十月刊）から同第十六号（平成二十年十月刊）までに連載されており、その後を受けてのものである。したがって、この「翻刻」の本紀要への発表は初めてにもかかわらず、タイトルが「翻刻『雪梅芳譚犬の草紙』（六）」ということになってしまっているが、不体裁をお許し願いたい。

合巻『雪梅芳譚犬の草紙』については、「初編上」の翻刻を掲載した『光華日本文学』第十二号の「凡例」を参照いただければ幸いである。

凡例

一、翻刻の方針のみあらためて掲出する。

1、図版は各丁見開きを一面とし、丁付けにより「一ウ、二オ」のように示す。

2、本文翻刻は、やはり〔一ウ一二オ〕のように冠し、改行位置は／で示し、丁移りは　」で示すが、書入れについては丁付けにこだわらない。

3、一面が二枚の絵組から成る場合、翻刻の方のみ半丁ごとに分離する。

4、原文はできる限りそのままとするが、漢字仮名とも、異体字、略体字は現行のものに改めた。

5、読みやすくするため、句読点を補い（ただし、序文の句点は原文のままとし、その旨を断わった）、会話文については「　」を、また会話文中の会話文には「　」を補った。原文にある「　は『　に改めた（原文の」あるいは　』は、』とした）。さらに仮名を適宜、漢字に置き換え、その場合もとの仮名をルビに移した。

6、原文の振り仮名は、右と区別するために（　）に入れた。ただし、袋・表紙および序文等、一部原文のままの振り仮名に（　）をつけなかったところがある。その場合は、その旨を断わった。

7、書入れは本文のあとへ一段下げて、文意の通り易い順に記した。

8、本文中にある読み進めるための合印については、すべて●で統一した。

9、「初編下」に至って出てきた、本文中の○（段落を改める意識で使用されている模様）は、その位置にそのまま翻刻した。

一、末尾に、『光華日本文学』第十二号から第十六号までに倣って、「三編下」に出るもののみながら、登場人物名

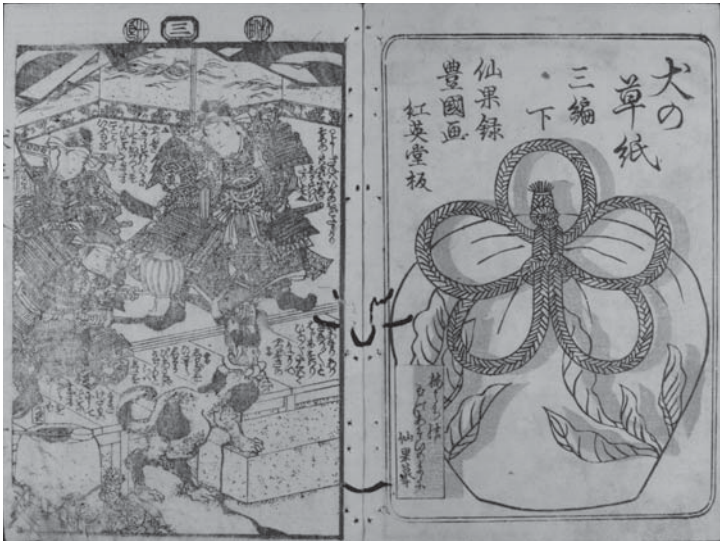
図版１　三編上原裏表紙（色刷）、三編下原表紙（色刷）

（まれに地名等もある）と、元の読本『南総里見八犬伝』の相当する名称との、対照表を付した。

（振り仮名は原文のまま）

〔原表紙〕
一名八犬傳（いちみやうはつけんでん）
雪梅／芳譚　犬（いぬ）の草紙（さうし）
一陽齋豊國画
三編下

〔原表紙見返し〕
犬の／草紙
三編／下
仙果録／豊國画
紅英堂板



図版２　原表紙見返し（色刷）、十一オ

梅鉢結／玉の遊ひのまゝに
仙果摹

〔十一オ〕

三

○義真は昼の程、たゞ仮／初の戯れに、しか／しかと言ひ／たりしを、●●／八房／は聞ゝ分けて、如何に／してかかげ列を／食ひ殺して来る／こと、不思議と／いふも●●余りあり。／「奇なり〳〵」と／始め終はり／人〴〵に詳しく／語りて、／八房の／●●／仕業を／只管／賞／美あれば、／氏幹／等は／舌を／巻き、／「獣／にして／人に／勝る／手柄を／も、／つぎへ

〔十一ウ―十二オ〕

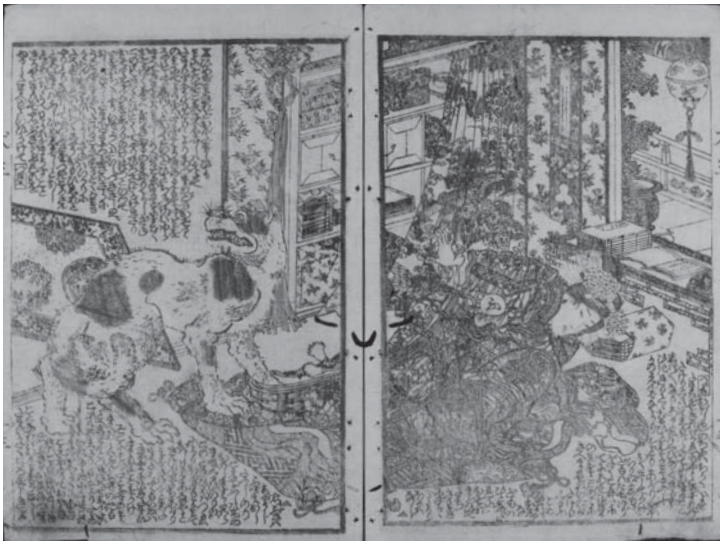
つゞき　君が仁心畜生までに及ぶ故か。しかしながら、神／仏の御利益にも拠るならん」と喜ぶところへ、物見の兵／庭口より馳せ参り、『敵に異変の起

図版３　十一ウ、十二オ

こりしか、大軍俄に／打ち乱れ、上を下へと騒き立ち、只事には候はず。速やかに／追ひ払ひ給はゞ、必ず勝利あらん」と告ぐるを、「さこそ」と／義真自ら撃つて出でんとし給ふを、義業は進み／出で、「御出馬にも及ぶまじ。我氏幹と二人して／容易く追ひやり候はん」と三百余騎を二手に分け、／大手は義業、搦め手よりは杉浦氏幹／撃つて出で、驀地に突き入れば、寄せ手の陣は／大将を犬に敢へなく食はれたり、呆れ／果てたる折からなれば、何かは以て／堪るべき。矛先合はする／勇みもなく、大方は／逃げもえやらず降参／する者いと〳〵多く、／夜明くる程に戦終はり、／鬨あげて義業は／山の如くに蓄へたる／敵の兵糧、指図して／皆城中へ運び／入れさせ、この由父に申させ給へば、／義真始め各〳〵の喜び譬ふる／ものもなく、久しく飢ゑし人〳〵に今朝ぞ真の／飯を賜ふ。されども日を経て食せぬ者、／俄に飽くまで食ふ時は忽ち命を落とす／ものぞと、先づ白粥を一碗づゝ残る者なく／賜ひけり。○森口九郎が預かりなる東條の／城は、滝田に

引き替へ猶半月の蓄へ／あれど、敵に厳しく囲まれて、これを／滝田へ送るに由なく、食事に飽けども」なか／〳〵に飢ゑたるよりも胸苦しく、幾度も／撃つて出で寄せ手を襲へど、目に余る大軍／なれば些とも怯まず、斯ゝりし程にかげ列は／犬に食はれて死んだる由、やう／〳〵に寄せ手も／聞ゝ知り、大将分の兵共／夜に紛れて落ち失せければ、残りの／士卒は攻めざれど、をめ／〳〵降参／したりければ、滝田東條二ツの城／ともに無事に帰るのみか、太刀山の兵／共主人に離れ、誰あつて城を／守る勇みもなく、あら／がひだてせし咄平などは／打ち寄つて首を刎ね、／皆義真へ降参／すれば、安房朝夷の／二郡も一手に／郷實の物となり、義業と／氏幹に太刀山平だちの／城を守らせ、／義真のいき／ほひは朝日の／昇るが如く／にて、いよ／〳〵／下を愛で／慈しみ、美名を／四方に輝かし給ふ。鎌倉の／成氏朝臣この由を聞ゝ及び、／室町殿へ推挙して安房の／国守に申し做し、治部大輔にぞ補せられ／ける。斯く善きことのみ重なるにも、前に使ひに／遣はしし大助は如何しけん、功ありて横様に●●死せし者ゝ／子なりとて、取り分けて／愛ほしみ、東條の主と／して婦志姫を娶せんと／心に許し給ひし甲斐なく、●」●行方も／知らずなり／しかば、／残り惜し／さ限り／なく、／隈／〳〵／捜させ／給へ／ども、生き／死にの程／さへ知ら／れず。力／なければ、先づ／差し当たり／此度のいく／さに功ある／者に恩／賞を行ひ／給ふ。事の始／めは八房のい／ぬを以て第一とし、／朝夕の食事は／更なり、綾／錦を褥とし、／僕数多」付け置きて／出で入りには／先を追はせ、斯くまで／重く扱ひ給へど、／八房更に喜ぶ／様なく、頭を背け／尾を伏せて／物も食はず／眠りもせず、／往にし夜に／かげ列の／首を持て／来し縁／端の／辺りへ／行きて、／義真の／出でさせ／給へば、前足／を縁端に／掛け鼻を鳴らし、／請ひ求むることあるが／如し。義真始／めは心付かず、魚／餅など折敷に載せ／給へど、彼は見もやらず、／猶求むること頻りなり。／斯ゝること度／〳〵なれば、／やゝその心を推し／量り、「あら疎ま／しや」と

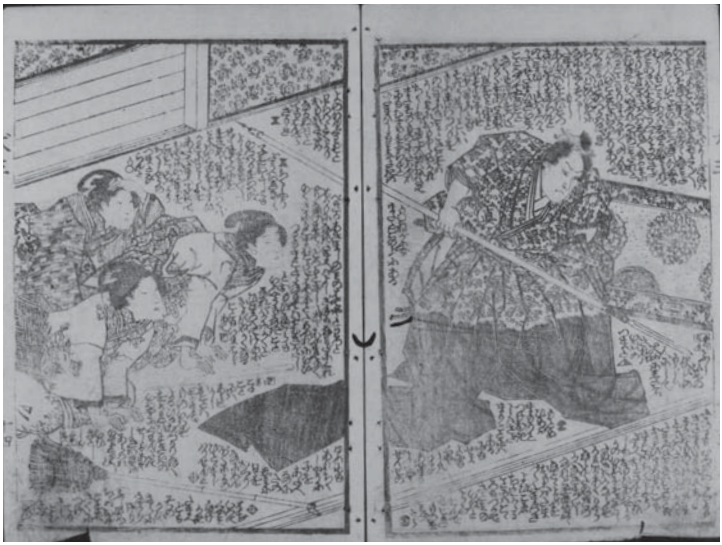
つぎへ



図版４　十二ウ、十三オ

〔十二ウ―十三オ〕

つゞき　思し召し、後には近くへ寄せ／給はず。されば彼も、やゝともすれば／哮り狂ひて僕等の手に余ること／しば〳〵なり。或る時首の鎖を／引き切り、止むる人を咬み倒し、／彼の縁端より踊り上がり、大／奥指して駆け／入りぬ。僕／共は立ち入り／難く、此方に／手に汗握る／のみ。男の手に／さへ任せぬ犬が／哮り／狂ふ／こと／なれば、／をん／な／共は／一傾／れに／恐れ／惑ひて／立ち／騒ぎ、／逃げ隠／るゝより／他は／なし。／●」●／八房は／障子／襖押し／倒し、乗り／越えて婦志姫の／おはします傍ら／まで狂ひ入りぬ。／この時姫は机／に寄り、本共読みて／おはしけるが、「あなや」と／叫んで立ち上がり、／身を避けんとした／まへど、早くも犬は／長やかに引き給ひ／たる裳裾をかけ、／そこにはつたと伏すのみか、／前足は振袖のたも／とへ自然と突き入つて進退／こゝに谷まつたり。元来只の／犬ならぬに、十年此の／方美食に飽き／肥え太りて、大き／さは子牛に等しき／八房が圧しになつたる／こ



図版５　十三ウ、十四オ

となれば、御身を動かし／給ひ難く、心雄々しき●●姫君なれど、御魂も／身に添はず、声さへ暫しは／え立て／給はず。女共、寄り集まれども、恐る、／のみにて用には立、ず。箒の柄以て畳を／鳴らし、たゞ「しい〳〵」と追ふといへど、人近付けば睨／まへて、牙を咬み出し唸る声実に凄く／恐ろしく、震へ戦き居るのみなり。義真／この由聞くと斉しく、手鎧引つ提げ駆け来り、／恐る、女を叱り退け、つつと入つて／「やをれ畜生、出でよ〳〵」と石突き差し伸べ／押し動かし給へども、八房は更に／動かず、益〳〵哮る声鋭く、咬みも／かゝらん勢ひに、義真は怒りに／堪へず、「無礼の畜生、思ひ知れ」と／鎧取り直して八房を突き殺さん／とし給へば、婦志姫「暫し」と押し／止め、『父上、妾が申すこと／聞かせ給ひて、八房が無礼を／許し給へかし」と言ひかけて　つぎへ

〔十三ウ―十四オ〕

つゞき　目を拭ひ給へば、義真は／手を止め、「其は

何故ぞ。疾く〳〵／言へ」と急ぎ給へば、流るゝ涙／振り払ひて吐息をつぎ、『今も／昔も、功あるは賞美せられて、／罪あるは罰を受くるが世の定／まり。それに違へば下〳〵も上に／背きて家破れ、国の乱れと／なる理。また数〳〵の人を／使ふ人の言葉に偽りありて、／如何でか人の使はるべき。／父上はこの犬に／何と約束し／給ひし。「もし／庵西を食ひ殺／さば娘をやらん」と／宣ひし由は自ら／語らせ給ひき。今／事成りてその事／無く、善美を尽くし／食を与へ、綾／錦を身に纏／はせ尊敬せ／させ給ふとも、／それ嬉しとはお／もふまじ。偽りを／宣ふ君と、さこそは／恨みに思ふらめ。彼／畜生にて大功立て、／またその者に戯れ／にも娘をやらんと／宣ひしも、皆前の」世の因果ぞと／妾、疾くより／思ひ定め、／泣かぬ日と／ても侍ら／ざりき。／●●畜生／道へ生きながら／子を落としても、／偽りを言はぬ／由を、下〳〵へ／知らせて国を／治め給へ。願はくば／身に暇を賜ひ、／彼に妾を／与へ給へ。子として／親に暇を／請ひ、心づから／畜生の／妻とな／らんと／●」●願ふ女、／またと此の世にある」べきか。浅ましの身の果てや」と、わつと／ばかりに泣き給へば、義真も涙に暮れ、／鑓投げ捨てゝどつかと座し、『あゝ過てり〳〵。／軍に囲まれ困じ果て、ふと戯れに言ひ／つるも、真ゝなりては背き難し／と思ひながらも、／言ふやうもなきこと／なれば、云云と／日頃経て今日に／及びぬ。斯くなる／ことも今初／めて●●／起／こる／こと／には／あらじ／かし。／御事は／三ツまで／物言はず、／夜昼憤り泣く／を憂ひ、洲崎の／窟に願立て／せしが、怪／しき翁／現れ／出で、しか〳〵／と／言ひ／諭し／しが、／●／右へ」●／左より　婦志／姫の／伏しの／文字は、／人にして／犬に／従ふ。／されば／犬の／妻と●●なるも襁褓の内より／定まりしか。執心／深き物ゝ怪の付きま／とふとは誰なら／ん、彼の／玉章が最期の言葉、／思ひ回せば「子も／孫も畜生／道へ落とさん」と言ひ／しも思ひ合はせらる。／彼の犬を育てし／狸は、必ず／彼が悪霊／ならん。狸の／替名様〳〵／なれど、玉面ぎよく／などゝ呼ぶを／思へば、たま／づら、たまつさ／呼び声／近し。斯ゝる／ことにはこゝ／ろもつかで、／郷實の／犬と／よろ／こ

図版６　十四ウ、十五オ

んで、／ゆゝしき／ものを／みづ／から／●●／求め、／姫が／守りと／付け置き／しは、定／まり事には／ある／にも／せよ、／世にも／悔／しき／我が／誤り。／縦しや／前世の」業にも／あれ、畜／生に／子を／与へ、／何／楽／しみに／日を／送り、／何面／目に世の／人ゝ交／はりせん」と／●●／恥ぢ／入つて、／悔やみ／嘆／かせ／給へ／ども、／その／甲斐／更に／なかり／けり。／婦志姫／父の御／言葉／聞くに／つけ／ても、／差し／込む／癪／

つぎへ

〔十四ウ―十五オ〕

つゞき我が手に胸を押し下げ〳〵、／『父君の御嘆き、思へば／妾も消え入るばかり。悲し／けれども是非もなし。さはれ／一旦仰せの趣、偽り／なき由彼に告げ、犬の／妻とし定まらば、やがて／妾ゝ命を捨てん。この身を／まざ〳〵畜生に如何で汚／され候はん」と言ひ差して顔／打ち赤め、袖以て覆ひ伏し／給へば、義真も逃れ得ぬことを／悟りて犬

に向かひ、『我戯れに／言ひしことを、汝は真、心得て／立てたる功は大きなれば、今こそむす／めを与ふるぞ。先づその所を退く／べし。早く〳〵」と急がし給へば、八房は／熟〳〵と主人の言葉を聞、取りし様にて／徐ら起き返り、身震ひしつゝ外の方へ／静やかにこそ出で行きけれ。五十子／御前は駆け入つて、『最前より／彼処にて、事の由は／見て知つたり。世に／浅ましき／こととも／様〴〵／あれど、／斯くばかり／憂き目は／あらじ」と／泣き伏しつゝ、夫を／恨み娘を託ち」正体もなく見えければ、義真は／面なげに差し俯いて居給へり。婦志姫は母を／慰め、『定まる因果といふ中にも、これ見て諦め／給へや」と、彼の洲崎にて翁の与へし数珠懐より／取り出だし、「母上にも知ろし召さん。この数取りの八ツの／珠に自づから文字ありて、仁義礼智忠信／孝悌の八つの文字と読まれしが、かげ列滅びし／その時より彼の文字は跡なく消え、是此の／如く如是畜生発菩提心の／八字に変はりぬ。此処を以ても今更に／逃れぬ業と諦めて、菩提の心を／起こすといふ言葉に後の世頼もしと、／父上恨みて給はるな。もう死んだ子と／思ひ切り、患ひてばし給ふな」とて、／更に悪怯れ給はねど、涙の隙は／なかりけり。婦志姫また宣ふやう、／『犬の心は知らねども、斯くなる上は／片時も館にありて人〴〵に顔／見らるゝは恥の恥。如何なる山へも／彼を連れ行き、身を隠さんと思ふ／なり。彼もし此処を去らざる時は／そのまゝ命を捨てんのみ。何時を／門出と待つべきならず。とても捨て／たるこの身の上、夜も夜中も／怖からず。八房を呼び出だし、／言ふべきことも言ひ聞かせ、彼がせん／様見し上は、今宵すぐさま出で／立ゝん。男にもあれ女にもあれ、／たゞ一人の供ゝ連れまじ。送りの／人も無用に侍り。身に添へ持たん／物とては、法華経八巻、料紙一帖、懐硯、懐剣の●●他には用ある／物もなし」と、それより／油を引き、髪梳らせ、／髪の飾りも皆打ち捨て／腰元共に形見に／賜り、白き小袖を／打ち襲ね、淑やかに立ち／出でゝ、更に父母義／業始め在り合ふ／者に暇を告げ、／庭へ降り立ち／見給へば、八／房は待ち／兼ねたる／面持ち／にて／頭を／上げ、●」●／喜ば／しげに／近／づけば、／婦志／姫は／

図版７　十五ウ、十六オ

身構へなし、／『汝八房、うけたま／はれ。卑しき／身にても／人は人、／神通／あつても／獣は／獣。／されば乞丐、／袖乞ひにても、／畜生を以て妻／ともし、夫、／する者／絶えて無し。／国小さく／とも」安房の／国の／主の／娘が／何故に／獣、／妻と／身をば／捨てん。／此は前の／世の業／にも／せよ、／つぎへ

〔十五ウ〕

つゞき／父上の／御言葉／重んずる／故ぞかし。／しかるに／汝／欲に／任せ、／もし淫／らなる振／舞あらば、／そのまゝ殺／して我死なん。／人、／獣、／けぢめを弁へ、／一旦の約束に／背かざる儀を嬉しと／思ひ、左様の行ひ／決して無くば、妾、／汝の●●妻たらん。もし／何方へも伴ひ行かば、／行くまゝに誘はれん。／如何にかする」と懐／剣抜き持ち、逆／手に取つて問ひ詰め／給へは、八房は／いと憂はしげに●●項垂れ居しが、頭を上げ／空打ち仰ぎ、長吠えして／誓ふが如き有様に、姫は／落

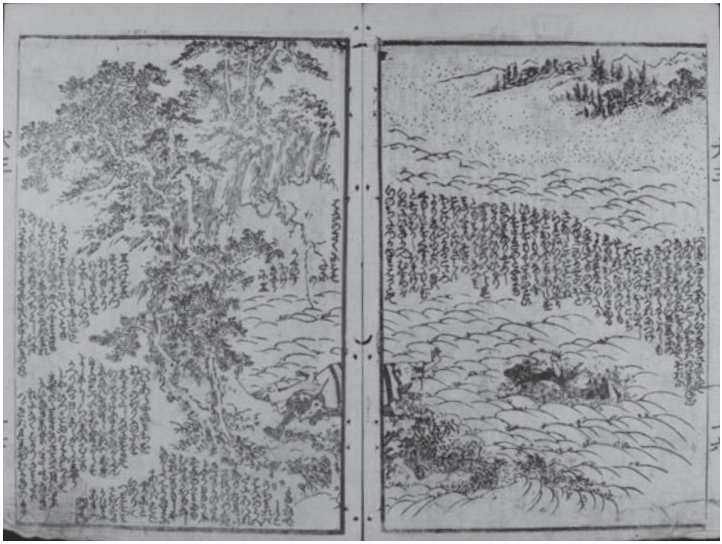
ち着き刃を収め、「如何にか／する」と寄り添ひ給へば、振袖の／端を銜へ、外へ〳〵と引き／行くに、払ひもえせず引かれ／行く。これか此の世の別れかと、／「父上母上、弟義業、／皆〳〵さらば」と嘘びながら、／我が行く方は何処とも、白綾の／裾高く取り、経文小声に／唱へつゝ、早門外へ出で給ふ。／この時日は早暮れ果てゝ、夕月の／影真砂を照らし、木枯らしの風、空／飛ぶ雁、物悲しさを猶添へて、／行くも止まるも如何ばかり、涙に／袖の濡れにけん。愚かなる身の／推し量りだに、拙き筆には／書き取り難し。／○義真暫し呆然たりしが／送りの者をも止め給へど、捨て／置くべきことならねば、前にまろ／のり時の首取つて持て／参りし甘瀧十郎／馬に飛び乗り／供人引き連れ、一丁ばかり道を／隔て後より行けば、八房は／滝田の城を出づると斉しく、／姫君を背に打ち乗せ、府中／の方へ駆けること、飛ぶよりも猶／速し。暁に及ぶ頃、／安房一番の高山なる／冨山といふ山に入りぬ。後追つ／駆けて照景は同じく／山路にかゝりしが、遂に馬／さへ乗り倒し、供の者は／皆遅れて、漸く追ひつく／僕と二人、息継ぎ敢へず／攀ぢ登り、山より山に／分け入れば、大きなる木立／物旧り枝葉隙なく空／見えず、岩が根纏ふ蔦葛、／苔滑らかに道狭く、／足も止まらぬ嶮しき／山を、急ぎに急ぎ／越え行く程に、横雲／峰に収まりて夜は早／全く明けにけり。／やゝ広らかなる所に／出で、遥か彼方を／見渡せば、婦志姫は／八房の背に腰掛けて、／対ひなる水いと荒き／谷川を／四のまきへ

〔十六オ〕

四

三のまきより

易〳〵と打ち越して、猶山深く／入り給ひぬ。照景等も辛くして川の辺り／に来れども、水深く



図版８　十六ウ、十七オ

流れ速く、元来／橋無く舟も無ければ、彼方へ越すべき／手立てもなし。さりとて、此処まで来つる甲斐なく／川一筋に止められ、御行先／をも見極めず如何ですご〳〵帰らる／べき。瀬踏みをせんと照景は、杖を／力に下り立つて、二足三足／渡ると見えしが、漲る水の／勢ひ鋭く、横にざん／ぶと押し倒され、「あなや」と／叫んで川中の岩に／頭を微塵に／砕かれ、／矢を射る／如く／落ち／行く／水に、／流れて／行方も知れずなりぬ。そも〳〵／甘瀧照景は海辺にて／人となり、水練の達者／なりしに、斯く言ひ甲斐なく命／を落とすは怪しむべき／ことなりとて、僕は／舌を震ひて恐れ、／麓へ下りて遅れし者と●●一つに／なりて滝田へ／帰り、この由／具さに申し／ければ、義真は／思ひ絶え、／再び人をも／遣はさず。／国の内へ／触れ知らせ、／「木樵柴刈る童と／いへども、冨山に登る／こと勿れ。もしこの定め／に背く時は、その者／死罪たるべし」といとおご／そかに掟させ、／また照景が／非命に死せ／しを／痛ま／しく／思し／召し、その／子ども等を／召

し出だし、形の如く／扶持し給ふ。斯くて事／無く月日は経てど、忘れ難くて／御心に懸ゝるは姫の御上なり。／「疾くにも此の世を去りにしか、／未だつれなく［つぎへ］

〔十六ウ―十七オ〕

［つゞき］存へあらば、如何なる様にて／あるならん」とつど〳〵口には宣はねど、／嘆き思さぬ折もなく、それに／つけても、大助が生き死にの／境さへ知らるゝ由も／あらざれば、彼につけ／此につけ、思ひ屈し／ては年の寄る心地／せられて、鬢の毛も／霜や置くらん、冴ゆる／夜は衾幾重か／重ねても、軒の／冬木の風の音／寒しとてこそ寝ね／られね。巌は屏／風と覆ふとも、嵐を／防ぐものならず。／隙を漏るだに厭ひ／しを、真木の冨山も／名のみなり。籔し／分かねば、陽の光／山懐は照らす／とも、自ら菜摘み／水汲まば、袖の／氷は解けざらん。／仏に仕ふる心／より真如の月は／曇らじを、薬求む／とその昔吠えけん／犬に引き替へて、娘が／命手束弓、春とて」花の咲くにこそ、／谷／の／鶯／法華／経／に●●つけ声／するや初／音の日、鳥／獣を／友として、何時／人の日とも知らじかし。／梅は暦と開くとも、／閉ぢたる胸の八重霞、気も／結ぼうる糸柳、雪折れ／無しとは言ふめれど、土としいへば／庭さへも白地には踏まぬ身の●●荒山道を／下り上り、何を／食とし何を着て／如何でか今日まで存へん。／死なばそのまゝ犬の食、／眼啄む山烏、／縦しや頭は白むとも／帰り来る日はあらざらん。盛／者必衰の花散りて／死出の田長の早苗月、祝ふ／甲斐なき菖蒲草、たゞ長き／音に泣くばかり。五月雨／続き、濡れ凋む垣の●●なで／し子／打ち見れば、／花の上／だに哀れ／なり。九夏／三伏の時／来り、彼の誕／生日も産／土の神にも／向けん顔もなし。／されども／もしや／存へて浮き世に／あらば健／やかに、と／祈りて／罪をみ／そぎする／川瀬に／秋の／［つぎへ］

図版９　十七ウ、十八オ

〔十七ウ―十八オ〕

つゞき　波立ちて、七日に架くる鵲／の橋も冨山の谷には無し。犬飼／星と聞くも憂や、仮の玉章名も／憎し。如何に執念き悪霊たりとも、／妖えうは徳とに勝たずとこそ聞け。／斯く浅ましき目を／見ること、猶我／心に思はざる過ちあつて／天つ神罪し給ふところなる／かと、憂きに堪え兼ね、義真の／思ひ過ぐしも理なり。千騎／万騎の敵をも物とも思／さぬ勇将も、世の成行には／争ひ難く、恩愛の兵／には胸を劈く心地して、時〳〵／悶へ悩ませ給ふ。況してや女のこと／なれば、五十子御前は姫君に別れて／よりの愁傷悲嘆、泣き暮らし、また泣き／明かし、「死に別れせば斯くまでに深くは／物も思ふまじ。もし恙なく／帰り来ることもやあると頼まれ／つゝ、其はまたとても叶はじと、／思ふにつけて今頃は如何なる／辛き目を見てか、また畜／生の餌となりしか。／縦し何事の無きにも／せよ、人の入ること難き／山に誰が養ひてか／日を送らん。飢ゑ凍え／して死ぬときのその苦しみは」如何ならん。例もあらぬ憂き

瀬に落ちても／親に物をば思はせじと、妾ほどには泣きも／せで、犬に引かれて行きし健気さ。目先に顔が／ちら〳〵と見えて悲しい〳〵」と思ひの有り丈言ひ／続け、神に仏に無事を祈り、心利〻たる老女／等を洲崎の窟へ代参と、表には言ひ做して／次〳〵冨山へ密かに遣はし、姫の安否を問はさせ／給へど、男勝りの女共、木樵に道の案／内させ、彼の川までは行く者あれど、雲霧深く／常に覆ひ、対ひの岸さへ見え難し。／水滔〳〵と速き瀬を、縦し舟／ありとも、女共の渡り得つべき／心地もせねば、皆〳〵空しく／帰り来て、斯様〳〵と申すにぞ、／五十子御前はいとゞまた、心の／憂ひ弥増して、さる山中に／如何にして存へあらんと思せども、／神籤を取らせ占ひに見せ給へば／どれ〳〵も「恙なくおはす」と言ふに、また／なか〳〵に思ひ増さり、嘆き積もりて／病となり、遂には重き労きと／なり行き給へば、医師験者道〳〵の／力を尽くせど、月に日に衰へ給ひ、／次の年の秋に及び、頼み少／なく見え給ふ。義真は／枕辺に近く寄りて、様〻に／力を付け慰め給へば、／腰元共に助けられ／辛うじて身を起こし、先づ／暫くは言葉なし。／目蓋陥り●●痩せ衰へし／頬骨伝ふ涙／をば、押さふる指は／糸に似て、それより／細き声弱げ／に、『斯く患ふも／何故ぞ。其は／申さずとも／知ろし召さん。／とても存ふ／まじき身の、／思ひ出でには／婦志姫を今／一目見て、玉の／緒も絶えなば／弥陀の御国へも／心残さず／参るへし。申さば／愚痴と宣ふ／べけれど、国の為／親の為身を捨て／山へ入りたる姫は、／類稀なる／志をたゞ珍／かなる因果ぞと つぎへ

〔十八ウ―十九オ〕

つゞき 思ひ捨てさせ／給ふならば、／下〻〳〵ばかりへ／お慈悲深く、／子には邪／見の／親なるべし。／冨山が／鬼棲む山／にもせよ、君が領／地の内ならずや。／さらばせめては／一月に一度／●●二／度見せ／にもやり、／みづ／からも／行き来／して／見も／し／見ら／れも／するならば、憂さ慰む／便もありなん。爪木を／拾

図版 10　十八ウ、十九オ

ふ童だに、／入るなと更に」戒め給ふ／御心こそ訝し／けれ。縦しや悪／魔の障礙／ありとも、国の主の／勢ひ以て、今猶／姫の存へて／彼の山奥に／在りや無しや、／知らまく／●●／思さば／難くもあらし。／思ひ立ちて／給はれ」と掻き／口説かれて義／真は、幾度も／吐息をつぎ、／『我が一言の過ちより／娘を失ひ、其所をさへ／病むばかりに苦しむる、我がまた／胸の切なさは、猶弥増しと／思し召せ。人をば山へ登／せぬは、我が方様の者は／更なり、もしや狩人／木樵にも見らるゝことの／ありもせば、さこそは姫も／恥づかしからめと、片方には／それを思ひ、また子の／愛に惹かされず、偽り／言はぬを下〳〵に知らする／とての業なれど、御身の嘆き／いと痛まし。心安かれ。●」●ともかくも／姫の様子／を尋ね知り、／遠からず／吉左右／聞かせん。／それを／力に／気を張りて、／病を忘れ／給ふべし」とて／此の所を／立ち出で給ひ、／熟〳〵思案／に／暮れ／給ふ。／次郎太郎／義／業は／去年より／真野に／おはしが、／母のいた／づき危ふしと／聞ゝて、

図版 11　十九ウ、二十オ

そのまゝ／此方へ来り、／夜昼看／病忠実やか／なり。義真／その夜義業に」今日のことゞも／物語り、／「五十子が／心休めに／いと容易げに／肯ひしが、／照景／谷を／渡り得ず／溺れて／死にし／由を／聞ゝ、「我／行かん」と／言ふ者／もなし。／縦しや／不敵の／輩あつて行く／とも、事を仕損じ／なば我がいき／ほひを落とす／のみか、その身も／滅びて／世に益なし。／我殿は如何に／思ふぞ」と／問はせ給へば、／小膝を進め、／『絶えて久しき／つぎへ

〔十九ウ―二十オ〕

つゞき　姉上の様子知れなば、これに増す幸ひは／候はじ。所詮彼此人を選び、家来に／仰せ給ふに及ばず。　某冨山へ分け登らん。／父の武徳母の／慈悲心、兜ゝ／被り鎧と／着て、家に伝ふる／弓矢を手ば／さみ、●●向かはゞ如何なる／障礙ありとも、／本意を達せぬ／ことあらじ。／許させ給へ」と／言ひ敢へず、／早打つ立つべき／気色なり。／義真手を／挙げ押し止め、／『潔けれど／そのやうに／逸る

ばかりは／勇士に／あらず。／親ある／程は遠く／行かず。また／危ふきに／近寄るを、／宜しき／人ゝは／言ひ難し。／しかも／我殿は／郷實の／礎ゝ」過ちあらば／いみしき不孝。／必ず／逸るな、／早まるな。／今宵に／限る／ことにも／あらず。／●上へ」／●下より／またせん／様もありぬ／べし。このこと／他所にな／洩らされ／そ」と諭して許させ／給はねば、義業返す／言葉もなく、畏まりて退き／給ひぬ。義真臥し所に入り給へど、／物を思せば疾くも寝られず。暁方に／及びしが、行くともなく来るともなく、その身は／何時しかたゞ一人、冨山の奥の谷川の／此方の岸に立ち給へり。この時いと〳〵／年老いたる翁／片方に現れ出で、『君は／姫君訪ねんとて是より奥へおはするならば、／御道標／仕らん。されども川ゝ」渡り難し。右手の方に木樵の通ふ／あるかなきかの細道あれど、去年より／入ること止められしかば、茅棘／やが植へ茂り、何処を道とも知る様／なければ、僕／最前枝を折りかけ／草を結びて、所〴〵枝折りして／置き候へば、御供をせずとも／迷はせ給はじ。あれあの方より／進ませ給へ」と指差し教へ／参らすれば、義真は訝しく／「謎の翁ぞ、名は如何に」と／宣ふほどに夢覚めて、六つの／時計ぞ軋りける。怪しくは／思しながら、思ひ寝に寝し／夢なりとて、深くは心に留め／給はず。今朝も彼此下〳〵の／訴へ事を聞こし／召すに、秋の日なれば／早闌けて、●●／未／の刻に／及ぶ／頃、／僅かに／暇を得／給へり。この時／東條の城預／かり森口九郎は、／早馬にて駆け／来つて御前に出で、／『急のお召しに万／事を打ち捨て、／只今参着／「仕る」と申し／上ぐれは、義／真は［つぎへ］

如是畜生／發菩提心

〔二十ウ〕

［つゞき］殊に機嫌麗しく、／『久しかりし森口唯之。東條／無事に治まる由、聞ゝ伝へて／祝着せり。政に／暇もあらじを、わざ〳〵／来るは五十子の病／重しと聞いての故か。遠／方大儀」と宣へば、／九郎は不審

図版 12　二十ウ、原裏表紙見返し

の顔色／にて、『此は御諚／とも／覚え申さず。／君の仰せを／承り、／彼の城を／守る／某、／内／君の／御病態／伺は／まほしく／思へども、／御許し／なきに／●上へ／●下より／城を空け、／参るべくも／候はず。／急／卒の／御召し／故、馬に／鞍をも置き敢へず、／夜を日に継いで斯くの／仕合はせ」。『しからば其方に用ありとて、／其は先づ何といふ者が使者には●●立ちし。／詳しく言へ。我は／呼んだる覚えなし」と／仰せに九郎はいよ〳〵怪しみ、／事の趣詳しく語る。その／物語は四編の始めに記すを、続けて読み給ふべし。

豊國畫　仙果鈔録

〔原裏表紙見返し〕

嘉／永／七／甲／寅／春／新／鐫／目／録

大晦日曙草紙　廿編／廿一編　京山作／芳綱画

図版 13　三編下原裏表紙（色刷）、四編上原表紙（色刷）

連理翅山雞奇縁　五稿／大尾　西馬補／芳綱画

八犬傳犬の草紙　廿八編／ヨリ／卅三編／マデ　仙果錄／豊國画／國貞画

松浦船水棹婦言　三／四　仙果錄／國芳画

御贄美少年始　一編／二編　同錄／國綱画

八重撫子累物語　二／三　同錄／國貞画

俠客傳仆摸略説　一編／二編　西馬譯／同画

花蓑笠梅雅物語　三／四　西馬譯／國輝画

嶋巡浪間朝日奈　六編／七編　種員譯／國貞画

小幡小平次物語　初／二／三　五瓶作／國貞画

鹽屋／文正　古今草紙合　十編／十一編　仙果作／國輝画

東都南傳馬町一丁目／地本草紙問屋蔦屋吉蔵板

登場人物一覧（三編下）

次に『雪梅芳譚 犬の草紙』三編下の登場人物名をかかげ（読み仮名・漢字とも表記は原文のまま）、その下の【　】に、相当する『南総里見八犬伝』の登場人物（その他）の名を示す。

郷實治部大夫義真【里見治部大輔義實】

郷實末元【里見治部小輔 源 季基】の子。安房四郡のうちの長狭・平群両郡の主。庵西かげ列に滝田城を攻められるが、義真の戯言を信じた飼い犬八房がかげ列の首を取って帰ったことによって、残りの安房・朝夷の両郡をも手に入れ、室町将軍から治部大輔に補せられた。

杉浦五十之助氏幹【杉倉木曽介氏元】

郷實義真の家臣。義真がかげ列を倒した後、太刀山【館山】・平だち【平館】の両城を義真の嫡子義業とともに預かっている。

森口九郎唯之【堀内蔵人貞行】

義真の家臣。長狭の郡の東條の城を預かっている。

甘瀧十郎照景【蜑崎十郎輝武】

義真の家臣。八房とともに富山【富山】に入った義真の娘婦志姫の行方を追う途中、激流を渡り損ねて溺死

する。

庵西三郎かげ列【安西三郎大夫景連】

元安房の郡の太刀山の城主であったが、まろの小五郎のり時【麻呂小五郎兵衛信時】が杉浦氏幹に倒された後、その居城平だちをも乗っ取った。自領の凶作の際に義真に援助を受けるが、翌年義真の領地の飢饉に乗じて挙兵し、東條・滝田両城を攻める。滝田城を攻略中、八房に首を噛み切られて死ぬ。

蕪土咄平【蕪戸訥平】

かげ列の家臣。かげ列が討たれても義真に降伏しなかったため、首を刎ねられた。

玉章【玉梓】

元平群の領主神輿光寛【神餘長狭介光弘】の側室であったが、神輿が逆臣山級濁左衛門貞金【山下柵左衛門定包】に滅ぼされた後、貞金の妾となる。貞金が義真に討たれたとき捕らえられ、斬首された。会話にのみ登場。

金毬大助孝則【金碗大輔孝徳】

金毬八郎孝利【金碗八郎孝吉】の子。幼名片三【加多三】。義真の近習。米の催促の使者としてかげ列の屋形へ赴き足止めされるが、かげ列の挙兵を知って脱出するため咄平と戦い、のち行方を眩ます。会話にのみ登場。

五十子御前【五十子】

郷實義真の内室。上総の国椎津の城主、丸谷入道浄連【万里谷入道静蓮】の息女。婦志姫、義業の母。八房とともに冨山に入った婦志姫を心配し、やがて病に臥してしまう。

婦志姫【伏姫】

郷實義真の娘。義真の戯言を虚言にせぬため八房の妻となり、冨山に隠れ住む。

郷實二郎太郎義業【里見治部少輔義成】

郷實義真の子。婦志姫の弟。かげ列を倒した後、杉浦氏幹とともに太刀山・平だち両城を預かっている。のち真野という所に逗留していたが、母の病を聞いて駆けつけ、看病する。

八房【八房】

義真の飼い犬。義真の戯言を信じて庵西かげ列の首を咥えて戻り、婦志姫を妻に請う。